

汲古一心

「春星秋霜」——貞香会の歴史——

大東亜戦争(二)は実に惨めな状況になり、一億総勢を上げて一敗地に——ということとは、ここに贅するをまたないのであるが、誰は生きていて誰が歿(くわ)くなったのかも判らない。また、生きていたとしても今どこに疎開しているのかも知れないという状況は、全く前途の見通しを暗くしたが、それでも勤め先の本拠が東京にある人が多いので、徐々に連絡がとれて互いに友人を呼びあつて、八月十五日から二ヶ月、三ヶ月と経過すると、約三分の一の会員には連絡がとれた。けれど、その会員の集会する会場のないには、ハタと当惑するばかりだった。

私は目黒の仮寓(かいう)で三月の空襲で焼け、浦和の羽島邸(はしまて)に下宿のひとり暮らしなので、日曜はその間借りのお二階。菩提寺もバラックながら庫裡(くら)の形のようなものが出来たので、木曜の夜はそこ。そのうち国鉄本社の囑託(じゆたく)をしていた縁故(えんこ)で、火曜はその庁舎(ていしや)の一隅(いちごく)を。戦後から十余年間淑徳女子高校の講師(こうし)であつた縁で伝通院(でんつういん)の仮本堂(かほんどう)の一部を貸していただき水曜という風に、逐次復旧(じゆくじやくふきゅう)してやれるようになってみると、では祭墨(まつぼく)もと貧しい状況の中でも月に二回くらい会えるとなると、平和ムードは反動的(はんどうてき)に回復(かふく)へ向かう機運(きうん)であつた。

大東亜戦争で逃げまわり、田舎に疎開(そかい)していても、また浦和に間借(まか)りをしていても、武田霞洞(たけのくさむら)先生に書いていただいた祭墨(まつぼく)の一軸(いつしやく)を正月ごとに壁にかけて酒饌(しゆん)を供え、たとえ形ばかりでもこれは一生の信念(しんねん)を捨てない証(しやう)拠(き)のようにひとり祝詞(いのち)を捧(たも)げてお祈り(いのり)をしていたのだから、待つてましたとばかり伝通院(でんつういん)の客殿(きやくでん)（これは戦後の東京都内第一と称せられた凝(こ)つたものであつたが）を拝借(はいしやく)して、ここでまず貞香会(ていかうかい)健在(けんざい)の烽火(ほくわ)か花火(はなび)のように、そのお祈り(いのり)を復活(かっくわ)させた。神官(かみ)はむかし日枝神社(ひえじ)の祀官(まつり)であられた内海元先生(うちみやま)が根津神社(ねづ)の宮司(みやうじ)をしておられるので、お願いに出ると、それは是非(ぜひ)私がやりたいと進んで祭事(まつりごと)も神饌(かみじゆん)の調達(てうたう)もお引き受け下さつての行事(ぎぎ)となつた。むかし「檀林(だんりん)」といつて一種(いちゆ)の仏教(ぶつぎやう)大学(だいがく)であつた伝通院(でんつういん)へ神官(かみ)が見えて、神式(かみぎしき)の祭墨(まつぼく)・書初(しよしよ)の式(ぎしき)をやるのだから、ちよつと珍奇(てんき)の観(かん)を免(ま)れなかつた。

しかしこのようなことが呼び水(よびみづ)となつて、この客殿(きやくでん)で「貞香会(ていかうかい)書道展(しよどうてん)」第一回(だいいちかい)が始められ、数回(たすくわい)の後(のち)、日本橋(にっぽんばし)の柳屋(やなぎや)画廊(がらう)、新橋(しんばし)の本屋(ほんや)の画廊(がらう)、三菱ビル(みつばちビル)地下(ちか)の「ガラスの城(しろ)」などを転々(てんてん)として回(まわ)を重ね、ついに上野公園(うげんこうえん)入口(いりぐち)に近い「上野(うげん)の森美術館(もりびいじゆく)」へたどり着き、相当(たうとう)の歴史(れきし)が出来てから、上野(うげん)の都立美術館(とていびいじゆく)へ入(い)ることもなつた。それ以降(いご)、今の書道展(しよどうてん)が今日(けふ)のように二本立て(にほんたて)で上野(うげん)で開催(かひかい)されるようになったのである。

まあこの隆運(りゆううん)の陰(かげ)には、戦後(せんご)、文学部(りやうがくぶ)のある大学(だいがく)に書道科(しよどうか)が置(お)かれ、そのひとつとしてごく早(はや)めに大正(たいしやう)大学(だいがく)などを担当(たんとう)することになり、自然(じぜん)に若い力(ちから)の漲(みな)つている人材(じんざい)を集め得(え)たことも大きな影響(えいぎやう)となつたのである。

この純仏教系(じゆんぶつぎやうけい)大学(だいがく)に勤(こ)めた縁(えん)で、宿望(しゆくぼう)の「仏教書道(ぶつぎやうしよどう)」を盛り上げて精神性(せいしんせい)の高い書(しよ)のジャンル(じやんる)にひとつ機関紙(きかんし)を作り、古(ふる)くして新しいものの中でひとつ欠(か)けている精神界(せいしんかい)の書道(しよどう)の勉強(べんぎやう)をとともにやろうとした。豊道春海(とよみちしゆんかい)先生の強力(きやうりき)な応援(えんぎやう)を得(え)て、京都(きやうと)各山(かくさん)の諸大徳(しよたいたく)、管(くだ)長(ちやう)様(さま)などを歴訪(れきほう)して、ご声援(ごせいえん)を仰(おん)いだすが、こちらの用意(ようい)にも弱(よわ)いところがあつたりして、この広い書道分野(しよどうぶんぎやう)に現代書(げんたいしよ)を——の運動(うんどう)は断(た)念(ねん)せざる得(え)なくなつたのは全く惜(おぼ)しいことであつた。惜(おぼ)しいことをしたが、その編集(へんしゆ)刊行陣(かんぎやうじん)に旗(はた)を振(ふ)ってくれた人々(ひとびと)に桑原(くわはら)喬(たけ)林子(りんし)、林(はやし)錦洞師(きんどうし)その他の人材(じんざい)があつたのに、あまりにも広(ひろ)大な全仏教界(ぜんぶつぎやうかい)とあつてはいたし方(かた)なかつた次第(しだい)であつた。

まあこんな落第(らくだい)もあつたが、小日向(こひなた)の深光寺(じんこうじ)では毎月(まいげつ)二十五日(にじふごにち)に明照会(めいしやうかい)と称(なづ)けて定期的(ていどきてき)に数年(しうねん)間(かん)仏教講和(ぶつぎやうかうわ)をや(や)り、さらに大正(たいしやう)大学(だいがく)でも月(つき)一回(いちかい)万華会(まんわかい)と称(なづ)けて月末(げつまつ)の土曜(どよう)日に禪書(ぜんしよ)を讀(よ)む会(かい)などもかなり長(なが)くやつた。これらが「仏教タイムス」に連載(れんざい)されたり、ピクチャー(ピクチャー)の長時間盤(ちやうじかんばん)になつたりして、仏教書道屋(ぶつぎやうしよどうや)と見(み)られる因(ゆゑ)にもなつた。何(なに)といわれても、歌集(かしゆ)にも随筆集(ずいひんしゆ)にもまた仏教思想(ぶつぎやうしゆきやう)的なものがあり、多(おほ)くは多いので、貞香会(ていかうかい)の何(なに)となく特色(とくしやく)のひとつと見(み)られてもいたし方(かた)ない次第(しだい)ではある。(つづく)

「書範」昭和五十七年

「筆間雜記」中村素堂(なかつ村すだう)随筆集(ずいひんしゆ)昭和六十三年(しやうわ)刊(かん)より転載(てんざい)。